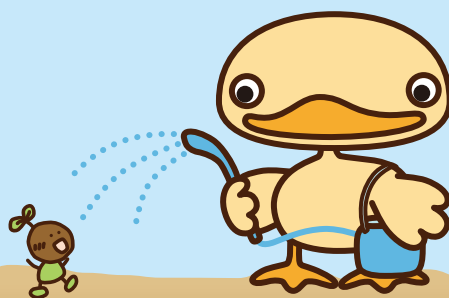


新しい 病害虫 Vol.10

本県は栽培される農作物の種類や作型が多様で、発生する病害虫の種類も大変多く、また、同時に野菜・花卉類、それらの種苗などの海外からの輸入や国内での移動が大幅に増加し、それに伴って新たな病害虫の侵入、発生が続いています。これらの新発生病害虫は既存の病害虫との見分け方が難しかったり、効果的な登録農薬がないなど防除に苦慮するケースが多く見られます。

このような、新たに発生した病害虫の防除対策に役立つよう、見分け方や防除法などについて紹介します。

- シソサビダニ
- シソモザイク病
- ピーマンえそ輪点病、トマトえそ病
- キウイフルーツかいよう病（Psa3系統）
- トマト葉かび病菌レース 4.9



高知県病害虫防除所

シソサビダニ

Shevtchenkella sp.

平成26年度特殊報第1号

発生作物：シソ（オオバ）

形態、生態など

成虫の体型は紡錘形で淡黄色、体長は約0.15mmと微小であり、肉眼での観察は困難である（写真1）。現在、本種の発生生態解明、防除技術の開発等について高知県農業技術センターなどで実施している（平成26～29年度）。

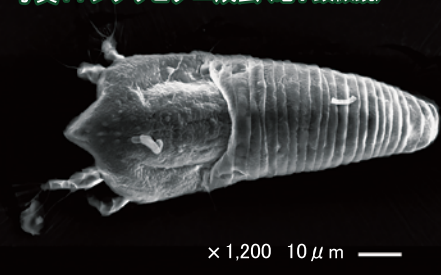
被害

主に生長点に近い葉や茎を加害する。初期は葉の基部に近い部分の表面が加害されるが、加害が進むと葉や生長点、茎の表面が褐色のさび症状を呈する（写真2、3）。著しく加害された株は落葉、枯死する他、シソモザイク病の原因となるPMoVを媒介する。

防除対策

ハウス開口部へのネット被覆、天敵、微生物農薬による効果が認められている。薬剤防除では、シソのサビダニに登録のあるコロマイト乳剤の防除効果が高いことが確認されている他、マツチ乳剤、アニキ乳剤がシソのシソサビダニに対し適用拡大されている。

写真1：シソサビダニ成虫（電子顕微鏡）



×1,200 10 μm

写真2：葉の初期のさび症状



写真3：さび症状



写真4：葉のモザイク症状



写真5：葉のモザイク症状と変形



シソモザイク病

シソモザイクウイルス *Perilla mosaic virus* (PMoV)

平成26年度特殊報第2号

発生作物：シソ（オオバ）

伝染方法、病徴など

PMoVはシソサビダニ（写真1）によって媒介され、種子伝染や汁液伝染、土壌伝染の可能性は低いと考えられる。感染株は葉に明瞭なモザイク症状を生じる他、発生がひどいと葉脈が曲がって葉が変形する（写真4、5）。症状は株全体で見られる場合と枝単位で見られる場合がある。なお、シソ以外の植物への感染は不明である。

防除対策

- (1) 苗への感染を防ぐため、本圃とは別の場所で育苗する。
- (2) 罹病株を抜き取る。この際、ビニル袋をかぶせて抜き取るなど、媒介虫であるシソサビダニが健全株に移らないよう十分注意する。なお、枝単位で発病している場合は、罹病枝を除去すると発症が抑えられる場合がある。

ピーマンえそ輪点病、トマト茎えそ病

キク茎えそウイルス *Chrysanthemum stem necrosis virus* (CSNV)

平成27年度特殊報第1号

発生作物：パプリカ、トマト

伝染方法、病徴など

CSNVはトマト黄化えそウイルス（TSWV）やアイリス黄斑ウイルス（IYSV）と同じ *Tospovirus* 属のウイルスで、主にミカンキイロアザミウマによって媒介される。ウイルスは持続伝搬され、1齢幼虫が罹病植物を加害することによって本ウイルスを獲得し、主に成虫がこ



れを媒介する。保毒雌成虫から次世代に本ウイルスが伝搬すること（経卵伝染）はない。

罹病株からの挿し穂等による栄養繁殖でも伝染されるが、種子伝染や汁液伝染（管理作業時にハサミや手指等に付着した汁液を介しての伝染）、土壌伝染はしないと考えられる。

本ウイルスに感染すると、ピーマンでは葉にえそ輪紋を生じることが報告されているが、パプリカでは黒枯病に酷似したえそ症状を生じる（写真6）。また、果実が着色不良となることもある（写真7）。トマトでは茎にえそ条斑を生じ（写真8）、葉や果実にもえそを生じる。（写真9、10）。

パプリカ、トマト以外にはキク、ピーマン、アスター、トルコギキョウ等への感染が報告されている。

防除対策

- (1) 発病株は二次伝染源となるので、抜き取り後、土中埋設、焼却などの処分を行う。
- (2) 媒介虫であるミカンキイロアザミウマの防除を徹底する。本虫に対し防除効果が高い薬剤はほとんどないので、施設栽培では薬剤防除だけでなく、天敵、防虫ネット被覆等を併用することが好ましい。
- (3) ほ場内および周辺の雑草はミカンキイロアザミウマの繁殖場所となるため、施設内外の除草を徹底する。

キウイフルーツかいよう病 (Psa3系統)

キウイフルーツかいよう病菌 *Pseudomonas syringae* pv. *actinidiae* (Psa3系統)

平成27年度特殊報第2号

発生作物：キウイフルーツ

伝染方法、病徴など

菌に感染した樹の葉や枝などから浸出した細菌液が、風雨による飛散や接触により、葉や枝の傷口、気孔などに付着することにより感染する他、接木や作業器具等によって伝染する。生育に好適な温度は10～20℃程度であり、32℃以上の高温で多くの菌が死滅する。

本病は枝幹、新梢、葉、花蕾に発生する。感染樹では、枝幹から白濁した菌液もしくは赤色の樹液の漏出が確認される。また、伸長中の新梢が感染すると水浸状の病斑を生じ、次第に黒色となり、亀裂を生じて萎凋枯死する。発病葉では不整形の褐色斑点が形成され、斑点の周囲に黄色帯（ハロー）を生じることが多い（写真11）。緑色果実品種より黄色果実品種での被害が大きいとされている。

防除対策

- (1) 病原菌が増殖しやすく、樹体内の菌密度が高い状態となる発芽期から果実肥大期までおよび収穫後から発芽前に薬剤防除を実施する。
- (2) 感染した枝や葉は伝染源となるため、発病程度に応じて、薬剤防除や枝の切り戻しを行う。主幹部からの菌液の漏出など、発病程度が重い場合は主幹の伐採を行う。切除および伐採を行った枝や葉および幹は二次伝染源となるので、土中埋設、焼却など適切な処分を行う。
- (3) 剪定後は、必ず切り口に癒合促進剤（トップジンMペースト）を塗布する。
- (4) 傷口から感染するため、風当たりの強い園地では防風ネット等により、防風対策を行う。
- (5) 発病樹の伐採や剪定に用いた器具は、必ず樹ごとに「0.02%次亜塩素酸ナトリウム水溶液」または「70%アルコール液」を用いて消毒する。また、園地から出る際には、これらの消毒液による長靴の洗浄を行う。

写真6：葉のえそ症状

写真7：果実の着色不良

写真8：茎のえそ症状

写真9：葉のえそ症状

写真10：果実のえそ症状

写真11：葉の症状

トマト葉かび病菌レース 4.9

Passalora fulva (Cooke) U. Braun & Crous

平成 27 年度特殊報第 3 号

発生作物：トマト

伝染方法、 病徴など

葉の表面に不鮮明な淡黄色の小斑点を生じ、裏面に灰黄色～緑褐色のビロード状のかびを密生する（写真 12、13）。下位葉から発生し、上位葉に進展することが多く、病勢が進むと葉は枯死する。

これまでに、国内では 13 種類のレースが報告されているが、異なるレースであっても病徴は同様である。

病徴はすすかび病と類似するため（写真 15、16）、判別の際は顕微鏡下で分生子を観察することが望ましい（写真 14、17）。

防除対策

- (1) 葉かび病抵抗性品種（CF 桃太郎ファイト等）を栽培しているほ場でも、葉かび病が発生する恐れがあるため、発生に注意し、早期防除に努める。
- (2) 多湿条件や肥切れ等による生育不良は発病を助長するため、適切な湿度管理および肥培管理を行う。
- (3) 多発すると防除が困難となるので、初期防除に努め、薬剤は葉裏にもかかるよう十分に散布する。



写真 12：葉かび病の症状



写真 13：葉かび病の菌そう

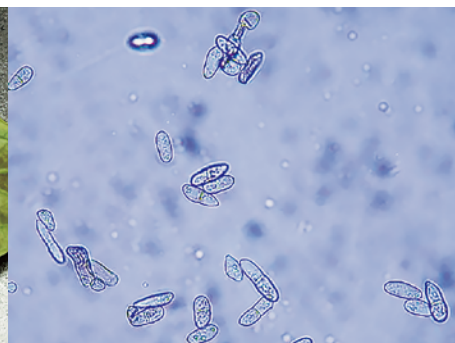


写真 14：葉かび病菌の分生子



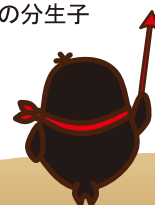
写真 15：すすかび病の症状



写真 16：すすかび病の菌そう



写真 17：すすかび病菌の分生子



高知県病害虫防除所では、農作物の病害虫や防除対策、また農薬に関する最新情報を提供しています。

高知県病害虫防除所

〒783-0023 高知県南国市廿枝 1100
TEL:088-863-1132 FAX:088-863-7470

TEL:088-863-1132 / FAX:088-863-7470 / E-mail:160523@ken.pref.kochi.lg.jp
URL : <http://www.nogyo.tosa.pref.kochi.lg.jp/?sid=2016>

平成 30 年 3 月作成